

---

# たいせつなこと

storick

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たいせつなこと

### 【Nコード】

N5455A

### 【作者名】

st or i c k

### 【あらすじ】

人にとって大切な事とは何か。考えればいくらかでも出てくる。人ならば様々にその人の価値観で決まる。世の中、面白く生きようとすればどういう事でもいい。例え、それが死に繋がるとしても要は当人が如何に悔いの残らないものであるかだ。大切なものは幾らでもある。幾らでも

## プロローグ

人にとって大切な事とは何か

考えればいくらでも出てくる。人ならば様々に

その人の価値観で決まる

世の中、面白く生きようとすればどついつ事でもいい

例え、それが死に繋がるとしても

要は当人が如何に悔いの残らないものであるかだ

大切なものは幾らでもある

幾らでも

「俺たち、付き合わないか？」

「うん。いいよ」

それが始まりだった。傍から見れば何かの冗談ともとれる告白。だが俺たちは2人して“らしい”と思った。

「ん……」

眠っていた……のか？ 何時眠ってしまったのか覚えていない。……いや、それも無理ないけど。

「すう……マーサ……」  
「……ハハ」

息のかかるほどの距離に、俺と一緒にベッドの上で寝ている女が俺のあだ名を呼んだ。

まさきち  
政吉だからマーサ。

「ん……」

綺麗な寝顔だと思った。よく梳かされた柔らかいショートヘアを指ですくい、そして頭を優しく撫でた。すると起きたようで澄んだ瞳が俺を見る。そしてにっこりと笑った。

「政吉……」

「悪い、起こしたか？」

「うっん。……初めてってキツイね」

強がりなのは目に見えている。薄っすらと開く瞳が妖しく見えてくる。一瞬ドキッとしてしまった。まあ……その、女になったからな。

ここはそういうホテルの一室。

今でも痛々しくも甘い嬌声が頭にこびりついて離れない。

高2で初体験、か。まあそんなに珍しいって訳でも無いだろう。

「女は損よね。男の方が断然得じゃん」

「愚痴るな。あんなに乱れてたのに」

「馬鹿」

何故か、初めてだった割に感想はこんなもの、だった。別に悪くはなかったけど…。互いに好き合って、しかもこの歳での恋愛だ。興味が無かった訳でもない。実際に以前より、より深くお互いを確かめ合う事が出来る訳だ。

…だけど、その反面ここまで登りつめていいものかと考えてしまっただけだ。そんな自分に嫌気が差すのも事実。それじゃあいつを馬鹿にしている。

要するに、怖いのだ。

幸せを逆に怖いと思ってしまっただけだ。行き過ぎる気持ちはそれを破られた時、絶望してしまうからだ。

あいつが好きな俺、あいつを避ける俺。

どっちも俺であり、どっちが俺なのか分からない。

避けたくは無い。だが本当にそう思ってるのかといえば自信が無い。

どんどん自分が分からなくなってくるのが分かる。これが恋のせい、と思えば納得する所もあるのだが。



## プロローグ（後書き）

まだプロローグですがどうでしょうか？ このプロローグだけ見るとちょっとアレな小説みたいですが、いやらしいものではないのでご心配なく。

## #1：放課後の屋上

虎井政吉、とらい まさきち 高校2年生。彼女もち。

彼女は諸橋奈美、もろはし なみ 同じく高校2年生。

お互いマイペースで、恋愛とは程遠い2人ではあったが、一緒にいる時は楽しかった。それが恋だというのに気付いたのもかなり経った後だった。それで告白の言葉もあれ。

「なに考えてる？」

「ああ、俺とお前が付き合い始めるまでの事」

「のろけだよ」

「そうだな」

放課後、学校の屋上。心地よい風を身体一杯に受けながら隣で同じく俺と夕焼けの町並みを見つめる愛しい人。

「私、夕陽って嫌い」

「嘘、マジで？」

「なんかさ、寂しい気持ちになるの。夕陽は夜になる。つまりは一日の終わりの始まりでしょ？ 小さい時とかみんなと遊んでいて、夕陽が出れば終わりじゃない。楽しい時間の終わりの時」

「詩人だな、奈美は」

本人の言う通り、彼女の横顔は何とも悲しい表情だった。



馬鹿な事を言えば、このまま消えてしまつように、儚い…。

「よく別れのシーンとか、夕陽の下じゃん」

「……」

何を言いたいのか、分かつてしまった。

つまりは、こいつも俺と同じ事を考えていたと言う事だ。

「あつ」

「……」

「ちょ、ちよつと…何？ いきなり…」

俺は奈美を抱きしめた。奈美も俺と同じように、怖いのだ。

「……そんな事ねえよ」

「…そう、だよ。私、すごく好きだよ、マーサの事」

「俺だつてそうさ。じゃなかったらどうして付き合つ」

奈美は俺の胸に顔をうずめた。微かに震えている。

何故、こんな風に考えてしまうのか。

「お前も怖いのか？ 幸せなのが」

「そんな事……ある訳無いじゃない……。今、楽しくてしょうがないよ。マーサと馬鹿やって、今の生活のちよつとした事でも楽しく思える…」

「……ああ、俺もそうだ」

頭を撫でる。誰かがいつここに来るかも分からないが、そんな事はどうだっていい。

「人って弱いね。一つになったと思えば、片方が無くなるのが怖くなっちゃう。そんな事、考えすぎだって自分に言い聞かせてるのに……モテない人達に失礼だよな……」

「こんな捻くれた事考えちゃう風に育った自分が嫌になるよ。要するにこの気持ちに自信の無い臆病者って訳だ」

自嘲してしまう。

だけどそれは違う。それは違う……

「それなら、逆らってやればいい。俺、お前と離れるなんて微塵も思ってたねーから」

「……カッコいい」

その日の夕陽は良かった、とその後の喫茶店での奈美の言葉。

## #2：雨

時期は初夏に近づいていた。徐々に気温が上がり、あの梅雨の蒸し暑さが迫ってくる。

ザア

雨が降っていた。肌がべたつく。その小さな事がウザく感じてしまふ。不快な気分だ。奈美が夕陽が嫌いというなら俺は雨の日が嫌いだ。曇り空の外を見ると憂鬱になる。寂しい気分になる。

(…………不愉快だ…………早く止めよ…………この雨…………)

昼休み、俺が外を睨みつけていると誰かに肩を掴まれた。馴れ馴れしいと思ったが知った顔。

「おいおい、怖い顔してるなマサ」  
「荒城あらぎか」

この学校に入ってからまともに友達と呼べる奴。  
荒城博仁あらぎ ひろひと。

誰にでも馴れ馴れしい奴で、何処か憎めない。顔は良くないがクラスの人気者であったりする。いわゆるお笑い担当の。

「何だよ、コレと一緒にお昼ご飯じゃねーのか？」

にやついて小指を立てる荒城。だが荒城の期待通りの結果にはならない。

「俺たち、そういうベタベタなのは嫌いなんだよ。確かにあいつは料理が上手い方だけど、俺の分も作らせるなんて奈美の負担になるじゃないか。そんなの、漫画の世界じゃないぜ」

「はあ、何でお前は……。それは彼女がいる優越感か？」  
「別に」

第一、あいつは違うクラスだし、もし一緒に食べるとしても横から冷やかされるのは目に見えている。

「じゃあ逆に聞くけど。恋人だから一緒にご飯を食べなきゃならないのか？ 馬鹿馬鹿しい。そういうの、何か必死で惨めだ」

「う……そりゃそうだが……」

大体、こんな話を話すのは正直恥ずかしい。

「しっかし余裕をかましゃがって。てめえなんていつか痛い目にあうぜ、きつと」

「あっそ」

つまりはこいつは俺の事が羨ましいのだ。……まあ、恋人がいるっていうのは普通羨ましいもんか。

「マーサ、今日私、委員会で遅くなるから」

「ああ、別にいいさ。そんな毎日必ず一緒に帰らないといけない訳じゃないしな」

「うん。じゃあまた明日」

「おう」

俺達の間係を知っている奴から見れば、かなり素っ氣無いやりとり。

だが、これが俺達のリズムである。互いに負担をかけない風にする。彼氏彼女が仕事しているのを待つなんて時間の無駄な事はしない。そう決めている。

ザアアア

ウザったい。この頃雨が降りっぱなしだ。ジメジメして、かなり不愉快だ。

(くそ……ホントに最近降りすぎ………ん?)

道の先、横断歩道なのだが遅い物体が歩いている。一目で老人だという事だわかった。あれじゃあ信号が変わる前に渡りきれないだろう。

「……………」

だが、助ける義理も無いし、俺はそんな立派な人間じゃない。その老婆の横を過ぎていって、横断歩道を渡った。ちらつと後ろを見てみると、重たそうな風呂敷を担ぎながら傘を持つというかなり無理な事をしている。

ザアアア

「……………クソッ……………だから雨ってのは嫌いなんだ」

俺はその婆さんに近寄って手を差し出した。周囲の目が気になる

……。くそ、恥。

「ん？ なんだい？」

「その風呂敷、持ってあげますよ。…ほら、貸して」

多分、今俺の顔は真っ赤だろう。慣れない事するからだ。婆さんは俺に対して笑顔で背負う風呂敷を下ろす。

「ありがとねえ、お兄さん」

そして横断歩道を渡り、婆さんに風呂敷を返した。

「立派だねえ。こんな事そうそう出来るもんじゃないよ」

「いいんですよ。別に急いでもないし」

俺はそっぽむいている。良い事をして悪い気はしないけど、やっぱりこういう事は恥ずかしい。

「ホント、ありがとう」

「……」

御辞儀してきたので、俺も返し、そしてその婆さんと別れた。

「……馬鹿じゃねーの、俺」

「フフフ、見たわよ」

「……」

聞きなれた声。馴れ馴れしい言い方。後ろから聞こえる声は俺を

絶望へと駆り立てる。

1番、見られてはいけない奴に見られてしまった。

「マサって意外と老人愛護なんだ。へー、こりや意外」

「う、うるさい。……三嶋：絶対この事は誰にも言うなよいいな？」

「ジュース一本で手を打とうじゃないか」

三嶋夏樹<sup>みしま なつき</sup>。同じ2年で奈美と仲のいい親友。

俺の第一印象は「やかましい女」。

だが、こいつこそ、俺と奈美をくつつけた張本人なのだ。

カンカラカラ

ゴミ箱に三嶋のシュートが決まった。さすがバスケット部。俺達は自販機の所で雨宿りしてた。

ザアアア

「ホント、よく降るよね。この雨」

「お前部活はどうしたんだよ。大会近いんだろ？」

「今日は他の部が体育館使ってるのよ。それで筋トレだけ」  
「なる」

つまりはサボったって事か。こいつ……エースだからって余裕か

まじやがって。

実質、三嶋のいる女子バスケット部は県でも上位にランクされている。それにこいつの実力も監督お墨付き。前に1on1やっただと勝負にならず。

「今日は奈美、委員会だっけ？ それにしてもあんた等は冷めてるのか余裕なのか…心配になってくるよ」

「ご心配なく、上手くやってますよ。お前のおかげだ」

「……まったく」

三嶋は大きく身体を伸ばし、俺を見て苦笑した。

「奈美が羨ましいよ。まったく、紹介したら気がつくっついちゃってさ。あーあ、私も彼氏欲しいな」

「女子には人気あるのにな」

「黙れ！」

そんな感じで俺達はくだらない事を喋り合って時間を潰した。

三嶋と喋っている間はウザったい雨も不快に感じられずに済む。

…でも、こんな所を奈美が見たらあいつはどう思うんだろうか…  
…？ それが気になって仕方が無かったのも事実だった。



### #3：続く雨

奈美とは喧嘩した事はある。しかもぶつたりぶたれたりと言ったかなりバイオレンスな喧嘩。その時、もう終わっただなと思ったけれどそれを機に、俺達の距離は一気に縮んだ。ありがちだが、もし、あの時お互いに言いたい事をはっきり言わなければ俺達の仲は終わっていたと思う。

「……………」

深夜。ついつい漫画を読みふけていたらそんな時間になっていた。電気を消し、ベッドに横たわる。

「……………」

ベッドに寝転がると、ふと、あのホテルでの事を思い出す。おもわず顔がにやけてしまう。そして、奈美の暖かな温もりが忘れられない。

（あいつも、こんな事考えているかな…？ いやいや…ちょっとこれはのりけ過ぎだ）

だが、そう思えば思うほど、奈美がどれほど大切だという事がわかる。そう思うと途端に寂しくなる。

恋は人を弱くする。

1人ではこのように、たまに鬱になってしまう。

(……いつ、俺はこんなに弱くなった？ 余計な事は考えるな。……  
……ったく……)

ザアアアア

また雨が降る。性懲りも無く、俺達に恨みでもあるかのように。  
……まあ、干上がるよりかはマシだけど。

「でさ、あいつ何て言ったと思う？」「こんな事なら最初からしな  
ければよかったのに」だって。ふざけんじゃないわよって感じよね」  
「全くだ。そりゃそいつが馬鹿だ」

休み時間、荒城と一緒に俺の所に来たやかましい女が話を盛り上  
げる。雨とどっちが嫌かと言えば……同じ位だ。

「あ、みんな集まってるじゃない」

「おっ、愛しい諸橋のご登場だぜマサ」

「うっせ」

珍しく奈美が休み時間に俺の所に来た。というのも訳がある。

「はい、マーサ」

「おう、サンキュな」

奈美からノートを受け取る。次の時間は古文。俺のもっとも苦手とする分野だ。逆に奈美は得意であったり、授業が俺のクラスよりも進んでいる事もあり、貸してもらっているのだ。

「デメエ、亭主関白気取りかぁ？ ええ？」  
「うっせ」

わざと大きな声で教室内に聞こえるように荒城は茶化す。三嶋もごちそうさまといった感じで溜め息なんて吐く。

「全く、見せてくれるわね」  
「まね。夏樹、そろそろ時間よ。移動教室だし」

そっか、と三嶋は慌てて隣の席の奴の椅子を元に戻して奈美と一緒に教室を出て行った。

「しかし、お前の知り合いの女子はいい女ばかりだな。ちょっとは紹介しろよな」

「三嶋がいい女あ？ 馬鹿言え。奈美の方が全然上じゃねーかよ」  
「いい女さ。一緒にいて楽しくなるじゃねーか。サバサバしててよ」  
「そういうもんかね。別に、俺はもう付き合ってるから関係ないけど」

「余裕マンめ」

古文の授業、奈美のノートを開いて、いつも感心する。丁寧で繊細な字。わかりやすいまとめ方。恥ずかしい言い方をすれば愛を感じさせる。

（綺麗な字だな……）

字をなぞる。奈美はどういう気持ちで書いているのだろうか。そう思い、首を振る。それは流石に考えすぎだ、と。

「最近、夏樹ってよくマーサと話してるよね」

「そう？ あ、やだ。別にマサを取ろうなんて思っ  
てないよ」

休み時間、トイレに行こうとしたら曲がり角から聞きなれた声が聞こえる。奈美と三嶋だ。

何となく俺はその場に行けずにいた。俺の話題だったからというものもあるが、何か険悪な

雰囲気のような気がしたからだ。

「……こんな事は言いたくないけど……」

「大丈夫よ。こんな事で奈美との仲を壊したくないしね。それに、マサは私の好みじゃないし」

（随分だな、おい）

「……それに、そうやって焼きもち焼くって事はいい事よ。健全だよ」

「……ごめん。私、案外嫉妬深いのかも」

「いいよいいよ」

「……………」

俺はその場から逃げ出すように立ち去った。聞いてはいけないような事を聞いてしまった気がしたからだ。

…その後、トイレに行くのを忘れて授業の時間になったのは言うまでもない。

ザアアア

「あーあ、早く止まないかな雨」  
「無理だろ」

放課後、久々に奈美と一緒に帰る。奈美は雲って雨を降り注ぐ空を見上げて文句を言う。俺もいいかげん、キレそうだ。

「……でも、雨って好きかな。何でも流してくれそうで」  
「マジ？ ……俺は嫌いだな」

前の夕陽の件とは反対になってしまった。思い出して俺は少し苦笑した。

「嫌な事とかさ、全部洗い流してくれそうで。……あ、でも半々かな。だって、雨の日に1人でいると寂しくなるもの」  
「……………」

確かに。雨の日に1人部屋の中になると、無性に孤独感が沸いてくる。暗く、自分を塞ぎこんでしまう錯覚に陥る。

「……マーサさ、最近夏樹とよく話すよね」  
「……」

顔には出さなかったが、ギクツとしてしまった。休み時間の時に話していたのを盗み聞きしていたからな……。

「あいつから話し掛けて来るんだよ。五月蠅いから今度お前から何

とか言っちゃってくれ」

「……でも、ノートを持ってくる時、マーサ、楽しそうな顔してた」  
「……おいおい、それは独占欲って奴だぜ。そういう嫉妬の仕方してるって危ないぞ」

「うん。……でも、わかってはいるけど……」

「……」

内心、俺は平静を装っていた。どうも奈美は嫉妬深いようだ。

…それに、ここ最近会う回数が減ってたからな。流石に奈美も女だったって事か。

ポン

「んっ」

奈美の頭に手を乗せる。

「俺が付き合ってるのはお前だぞ？ …ていうか、こんな恥ずかしい事言わせんな馬鹿やろ。変な心配して、友情を壊すような真似はすんなよ」

「……うん、わかった。……でも…ね」

「ん？」

「…ううん、何でもない。何でも」

「？」

奈美がその先、何を言いたかったのかは謎だった。その時の顔は心配な表情だったが。

ブウウウウン

バシャアアアア

「キャッ！」

「うおっ」

その時、道路を走る車が水溜りの水を豪快に俺達にぶっかけてきた。道路側にいた奈美がモロに食らってしまう。

「あーあ、こりゃひでえ。全身にかかつちまったじゃんか」

「うっ……。びしょびしょ。あの車……」

「ほら、使え」

たまたま持っていたタオルを奈美に手渡す。顔にまでかかってしまっている。

「……………」

奈美は顔を拭いた後、上着の制服のシャツを拭く。

…濡れて水色の下着が薄っすらと見える。俺は奈美から目を離せないでいた。

ドクン…

「……………」

「ありがと、マーサ。…でもやだなあ。電車乗って帰るまで、こんな濡れた格好でいなきゃなのかあ」

「……………あのよ」

「ん？」

何を考えてるんだ俺は。……考え直せ、俺。

「……俺ん家来ないか？ もうすぐだしさ、乾かしていけよ」

俺は何を言っている？ しかも情けない事に手が少し震えている。  
奈美は少し考えて決断した。

「まあいいか。それじゃお言葉に甘えて」

そして心の中でほっと安心する俺がいた。理性が頭の隅にいく気がしてならない。

暗い欲望が、徐々に身体を支配していくようだった……



## #4：愛

俺の家は両親との3人家族。住宅街に佇む一軒家だ。親の帰ってくる時間はいつも7時位と遅い。

「おじゃましてーす」

実は奈美が俺の家に来るのは初めてだった。

情けない。まだ心臓がドキドキしている。彼女を家に連れてくるだけで……。もう互いに知り合った仲だというのに。

「着替えは？」

「あ、大丈夫。体操着があるから」

丁度よく、乾燥機があつたのでそれを使ってもらう。俺は一足先に部屋に入っている。

「ハア……。こんな事するなんてな。奈美も奈美だ。何も疑いも無く来るなんて……」

俺は少し後悔していた。このような行為に出た俺にもだがあからさま過ぎる。

事実、奈美のあんな姿に欲情してしまった。中学生じゃあるまいし……。

それに怖い。見境無くなってしまう事を。愛情と肉欲はかけ離れ

た所にある。お互いを求める事を愛と囲ってしまふ奴らもいるとは思ふ。だけどそれは都合のいい言葉だ。ただ身体を欲しているだけ。俺はそんな考えが嫌いだった。

彼女だと言っても、好きにして言い訳は無い。最終的にはそういう事に辿り付くとは思うが、俺は奈美を抱きたい為に好きになった訳じゃない。

…じゃあ、何で好きになった？

それはあいつといると安心するからだ。異性で一緒にいて…一緒にいたいと思う相手。

(ダメだ…今日の俺はどうかしてる。イカれちまってる)

思いつきり頬を叩いた後、誰かが部屋をノックする。

ドクン

だから、俺はウブなガキかつつの。

「いいぞ、入ってきても」

ガチャ

体操着姿の奈美が入ってくる。Ｔシャツに半ズボン。奈美は俺の部屋を見渡し、隣に座ってくる。

「これがマーサの部屋ね。…どこにエロ本が隠されているのかな？」

「勝手に人の部屋を搜索するな。お前だって探されたら嫌だろ？」

「まあね。…でもちよつと散らかってるね、部屋」

「ゴミ一つ落ちてない綺麗な部屋だと思ったか？」

「あり得ない」

「だろ」

納得する奈美。ちよつとめんどくさがりな俺はあまり部屋を片付けない。まあ、ほどほどに掃除はするけど。

沈黙が訪れる。何となく気まずい。

「ねえ、服を乾かす為だけに呼んだ訳じゃないでしょ？」

「！」

聞かれたくない事を遂に聞いてきた。言わなくてもあつちもわかっていると思うが、俺に言わせようとしている。

「……………すまん。ちよつと下心があつた」

「そんな事わかつてるよ。ただ服を乾かすだけで彼女を家に呼んだ

りしないもんね、普通」

何か怒られてるような気がする。だが、奈美は笑っていた。

奈美の手が俺の手に触れる。柔らかな手の感触が伝わる。

「でも、マーサが積極的に来るなんて意外」

「俺も驚いてるよ。自分の馬鹿さ加減に」

穴があるなら入りたいくらいだ。

「……………でもいいよ」

「！」

予想はしていたが、驚きの一言。奈美を見ると少し頬を赤くしている。期待と不安に入り混じった顔。

「……………」

俺は奈美の肩に触れようとして……………止めた。

「……………どうして？」

「俺は……………お前を抱く為に呼んだ訳じゃ……………」

「……………無理しなくていいよ。別に私は嫌じゃないよ？」

「確かに、お前の気持ちを考えたりしてはいるけど……………。でもよ……………」

「……………」

「んっ!？」

柔らかい唇を押し付けられる。そのまま俺はベッドに倒され、奈美は俺にキスをする。

「……変だよ、マーサ。……私を避けようとしている」  
「そうじゃないんだって」

唇を離し、俺達は起き上がった。奈美は悲しい顔で俺を見ている。

「だったら何？ ……私、ちょっと期待してた……」  
「じゃあ俺はお前の気持ちを聞かないで無理矢理するべきか！？」  
「そうじゃないだろう？」  
「……」

と、そこで言い留まった。ついつい大声を上げて怒鳴ってしまった。俺は俯いて自分の身体を抱いた。

「……怖いんだよ、そういうのが。…お前の身体に拠り所を求めてしまつて、抜け出せなくなってしまうかも知れないんじゃないかって」

「そんな……。それ、つまりは私の事が嫌いって言ってるようなもんじゃない」

「抱くのは簡単さ。ただ、そればかりでお前を何で好きになったのかを忘れるのが怖いんだと…思う。俺、自分に嘘を言ってる。本当はお前を抱きたいのにさ……。ただ、甘い汁の味を知ってしまったら、中毒のように、また求めてしまう。俺はそれが嫌なんだ…」  
「……」

自分で何を言ってるのかわからなくなってきた。自分を矛盾してるのは確かだ。

「身体を求めなきゃいけない愛なんて……それは愛じゃなくて肉欲だ。……俺は、本気でお前の事が好きだからこそこんな事言っのかも知れない。自分の考えを自分で壊す気がして……」

「……もういいよ。そこまで難しく考えなくてもいいよ。……私だって、本当にマーサの事が好きよ。……確かに、好きだからって、絶対、身体を求めるなきゃいけないなんておかしいよね」

「奈美……」

奈美が自嘲しているように見えた。

「……マーサがそんな風に考えていたなんて。……私、そこまで貴方の事を想ってなかったかも……。……ゴメン」

「謝るなよ。……やっぱり、詭弁かな」

奈美は首を横に振る。

「うっん。……それでいいんだと思う。少なくとも、私は賛成」

そう言って、奈美は俺の胸に顔をうずめた。俺は溜息吐いて形のいい頭を撫でてやる。

「でも、抱く時は抱いてやるから覚悟しとけよ」

「……バーカ。……好きだよ」

そして俺達は、唇を重ねあった。長く、深く



## #5：現実

愛とは何なのか

それを考えてしまつては幾ら時間があつても足りないし、答えに行き着く事は無いだろう。それを考えない事が愛なのかもしれない。考えてしまつては余計に頭がパニックしてしまう。

結局、哲学になつてしまつて何が何だか訳が分からなくなる。

こんな事を考えている事自体、わからない。

「愛」 可愛がつて大切に事、また、その心。愛情。異性を恋しく思ふこと、また、その心。

と、辞書にはあるが、言葉で表すのは不可能だと思ふ。

口で説明できるものではないと思ふ。

それが愛であると思ふし、何で人を好きになるのかなんて誰にもわからない。

ただ、わからないこそ、恋は難しく、破局するのだ。それを乗り越え、真に愛し合える事こそが、本当に愛なのかもしれない。



だけど、1人の人間がいくら言葉で飾ってもそれはただの都合のいい御託にしか聞こえない。

だからこそ、みんなの価値観は違うのだと俺は思う。

少なくとも、俺は奈美の事が好きだ。それでいいと思う。

こんな感情を抱けるのだ。

何も、怖がる事は無い。

そして、時が訪れた。

コツコツコツコツコツ

俺は足早に病院内を歩く。走らないのは、動揺と恐怖と期待が入り混じった、酷く不安定な精神状態だったからだ。

コツコツコツコツコツ

この足音は不気味だ。この時にそう思った。

やがて、目的の場所に着いた。

そこには見覚えのある顔が2つ。奈美の両親だ。前に何度か会った事がある。

ガチャッ

扉が開き、医師が出てきた。

「先生！」

両親は駆け寄る。まだ俺の存在には気付いてないようだ。慌てて主治医に問い詰める。主治医はきっぱりとこう答えた。

「残念ですが……娘さんは、亡くなりました」

亡くなられました

「あああああああああ！！」  
「うっ……奈美いいいい！！」

ザ  
ア  
ア  
ア  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー

雨が降っていた。俺は傘も差さずに着てしまったのでびしょ濡れの状態でここまで来た。その場に立ち尽くし、水滴が水溜りを作ってしまう。

泣き崩れる奈美の両親。立ち尽くす俺。その場は悲しみに包まれていた。俺は一步も踏み出せず、一声も出せない。

……そして、何よりも酷いのが、目から何も流れなかったと言う事だった。

どうして？

わからない。

「嘘……………だろ……………」

現実だった。

それは突然だった。奈美と放課後別れ、俺は部屋でゲームをしてだらだらしていた時だった。奈美の両親から電話がかかり、戦慄が俺を襲った。初めは何の冗談かと笑ってしまった程だ。だが、事実だ。

奈美が車に撥ねられた。交通事故。瀕死の重傷。  
それを聞いた頃には足が勝手に俺を走らせていた。傘も差さず、  
その病院に駆け込んだ。

そしてこの結果。

言葉にすれば簡単だ。

もちろん、信じられなかった。

だって、そうだろ？ さっきまで話していて、明日また会おうぜ  
と言って別れた奴が撥ねられて死んだんだぜ？

現実味が帯びてこなかった。何も考えられなかった。

そして霊安室で、奈美の顔を見て更に現実味がなかった。

死んでいるというのに、顔は何も傷が無い。無傷だ。

ただ、後ろの頭蓋骨は割れ、顔から下は酷く、複雑骨折やら何やらで人間の格好ではなかったようだ。一目で絶命している事がわかるくらいだったらしい。撥ねた車はトラックだった。

簡単な理由だ。居眠り運転。そして不幸にも奈美が撥ねられたのだった。

冗談としか思えない。

俺の中で、何かが音を立てて崩れていくのがわかった。そして俺の心の中に大きな穴が空いた事も、わかった。

その訳が、愛する恋人を失っても涙一つ流さないからだった。

これは現実なのか？

現実だ。日付もちゃんと今日だ。雨も本物。建物も本物。映画の

世界ではなく、全てが本物。

だが、全てが空虚なものに見えた。

とにかく、終わったのだ。

俺と奈美の物語は終わったのだ。

奈美は死んだ。

いなくなつた。

奈美は死んだ。

雨が止まない



## #6：涙

葬式、多くの人が奈美の家に集まった。クラスメイトや学校で奈美の友達も大勢来た。

この日も雨が降っていた。葬式にぴったりと云わんばかりのシチュエーションだった。悲しみにくれる人、泣く人、そこは全てが悲しみに包まれていた。全ての人の表情は沈んでいた。

ただ1人、俺を除いて。

「マサー!! あんた……何でそんな顔してるの!？」

「三嶋……」

横を見れば、激怒した三嶋が俺に怒鳴ってくる。この場でも関係なくだ。

理由はわかっている。水溜りに俺の顔が映っている。悲しむ訳でもなく、暗い表情でもなく、涙を流す事もなく。なんの問題も無いと言った感じの顔を俺はしていた。

バチイン!

「ッ……」

容赦の無い張り手。三嶋は泣きながら、物凄い形相で俺を睨む。

「あんた……よくそんな顔してここに来たわね……」

「……悪い」

「謝る位なら、泣いて見なさいよ!」

言い返す言葉も無かった。だが、どうやっても涙が出てこない。

自分の感覚が麻痺しているかのようなうだ。慌てて荒城が三嶋の肩を掴む。

「三嶋、落ち着けつて。霊前だぞ」

「……くっッ!」

ダッ

まだ何か言いたそうだったが、三嶋は周囲の目を気にして何処かへ行ってしまった。

「……ここじゃなんだ。あっちに行こうぜ」

「ああ……」

「正直、俺も三嶋と同じ意見だぜ。お前…悲しくないのか」

「悲しいさ。……当たり前だろ」

奈美の家から少し離れ、人のいない所まで来て、俺達は壁にもたれた。

「じゃあ何だつて……いや、深くは言わねえよ。1番キツイのは両親とお前だからな……」

「……カッコいい事言ってんじゃないよ」

その励ましが、何よりも心に染みた。

認めるのが怖かった。壊れそうで。

~~~~~

今日も少ししか食べなかった。親は心配するが、俺の気持ちを悟ってか、強くは言ってこなかった。

部屋に戻り、電気をつけないまま、ベッドにうずくまる。  
満月の夜。満月は綺麗だった。星が無数に闇の空を彩る。

「……………」

そんな果てしない宇宙を見上げ、俺はしばらくそのまま空を見つめていた。

「……………」

死んだ。

奈美が死んだ。

嘘だと思いたかった。

嘘だと言って欲しかった。

だけどこれは現

実。

## 目の前の現実

「……………」？

星が霞んで見えた。ぼやけ、見えなくなる。

目が熱い。目に何かが溜まっている。そして顔を伝って流れていく。

「涙……」

俺は泣いていた。……………いや、泣けた。

「うつ……………うう……………ああああ……………」

声にならない嗚咽。

息がつまる。

胸が痛い。

ポ  
タ  
ッ

涙が枕に落ちる。枕が濡れ、俺の視界がぼやける。目を閉じれば、奈美との生活が浮かんでくる。

「やめる……」

思い出すんじゃない……。

思い出せば、辛くなるから。

こんな風になってしまってから。

政吉君かあ、……じゃあマーサね

「うつ……あ……うあああ……」

アハハ、マーサは間抜けだねー

「ふぐつ……はっ……うあああ……」

好きだよ

俺の中で何から何まで崩れ去っていく。まるで身体の半身がなくなっただかのように。

…いや、実際無くしたんだ。

壊れていく。思考が定まらない。  
否定する自分が惨めで、現実を受け止めようとしない自分が情けなくて……

とにかく、泣いた。

泣きじゃくった。

もう2度と戻らないあの日の事を思い浮かべて

~~~~~

「……………」

全てが終わった。星を見上げる俺の瞳からは、もう涙は出なかった。俺の中で、何かが壊れた事は確かだった。

やっと、奈美が死んだ事を認めたのだと思う。

まだ悲しみの残滓が俺の中にある。

でも、終わった。

通り過ぎた。

キスが終わった後、

奈美が聞く。

ねえ、もし、私が明日死ぬと

したら抱く？

抱かない

自分の考えに嘘つくから？

そう

……意外と頑固だね

当だったら…

でも、もしそれが本

だったら？

しれないな

自分に嘘をつくかも

めたのに？

えー？ 折角、カッコよく決

ヤメ！

あゝ、もう、ヤメ

ねえ！

不吉な事言っんじや

あ、マーサ、顔真っ赤

うるせ

通り過ぎた………



## #7：暗闇

学校を歩くと、同情の視線が多い。

むしろその方が嫌だ。やめてほしい。

そんな偽善の中にいると思うだけで、嫌気が差す。

哀れんだ目で俺を見る、偽善の瞳。

「……………」

それはある意味、集団での責め苦だった。  
この場にいる事が辛い。

放課後、廊下を歩いていると三嶋が立っていた。もちろん、俺を待っていたようだ。

「マサ」

「……三嶋か」

また何か言われるのか、と思いきや三嶋の顔は暗いものだった。  
…それはそうだろう。親友が死んでまだ数日しか経っていない。

廊下で突っ立ってしまい、他の人から見れば怪しまれるとは思ってたが、俺を呼んだままの三嶋は黙っているばかりだ。

「…何だ？ 用が無いなら帰るぞ？」

ザアア

雨がうつとうしい。何時まで降るのか、それが気がかりだ。

「……前はゴメン。ぶったりして」  
「は？」

予想外の言葉に、ついつい間の抜けた声を出してしまった。

「だってあれは……」  
「うつん、よく考えてみれば悪い事したって。辛いのはあんたなん  
だって……」

「……。いや、謝らなくていい。あの時は俺が悪い」  
「でも……」

「いいんだって。……もう、やめよう……。早く部活に行けよ」  
「……わかった」

そう言って三嶋は去っていった。  
いいかげん、悲しむのが嫌になってきた。

~~~~~

「……………」

自分の部屋で、俺はある物に目をやる。奈美と一緒に映った写真  
だった。…そういえば、写真なんて撮ったっけ。

「……………」

眩しいほどの笑顔で、俺に腕を組む奈美。

…でも、その笑顔も“痛い”だけだった。

ガシッ

「くっ……………!!」

写真を握り締め、ゴミ箱目掛けて投げようと振りかぶる。

……だが、出来なかった。

「くそっ……………くそっ……………」

…また、一歩踏み出せない。  
…脱け出せない。

ドンッ

「あ、わりい…」

学校で、曲がり角で男子にぶつかってしまった。肩だけだったが、そいつは後ろの連れの2人と一緒に俺を取り囲むように立つ。

「お？ こいつ、交通事故で死んだ諸橋奈美の男だぜ？」  
「へー、こいつが。…なんか暗い野郎だな」

…何だこいつ等。ニヤニヤ俺の方を見て。

「あーあ、こんな野郎が諸橋の彼氏なんてな。絶対俺の方がお似合いだぜ。…俺さ、前からあの女に目をつけててな？ いい女だったじゃねえか」

そいつは俺に言ってきた。…正直、こんな奴らの相手をしている暇は無い。無視して先を歩こうとする。

「おいシカトかよ。何か言い返してみろよ、ああ？」

「いつまでも死んだ女の事でジメジメしてんじゃねーよ」

頭が悪い。通り過ぎた俺に、罵声を浴びせるが俺は無視する。程度の低い、ガキの罵声。呆れてものも言えない。

「センチになってカツコぶるってか？ ホントは彼女ともうヤレない事を後悔してんだろお、ヤリ男お！」

……何？

「奈美ちゃーん、何で死んじゃったのー？ もうSEXできないじやーん」

ヒヤッハハハハハハハハ！！

バーカ、お前面白すぎ！

ハハハハハハハハハハハハ！

「

」

「ハア……ハア……ハア……」  
「も、もう……許して……」

気付いたら、男達に殴りかかっていた。最初、1人の鼻っ面にキックを入れ、その後2人にボコられ、もう滅茶苦茶だった。

怒りに任せた俺は、痛いのかお構い無しで相手を痛めつけた。殴って、殴って、殴りまくり、今、鼻血を垂れ流し顔を腫らした男が泣きながら俺に請う。マウントポジションを取り  
そいつをボコボコにした俺だが、それで止めた。

口を切っていた。鉄の味が口に広がる。こんな喧嘩をするのは初めてだった。

誰でもよかったのか  
もしれない。

ただ、この憂さを晴  
らす相手が欲しかった。

巡った後

爽快感が体中に駆け

ならなかった…

自分が馬鹿に思えて

~~~~~

あの喧嘩で俺は一週間謹慎処分を食らってしまった。親にはこっぴどく怒られた。だが、俺は後悔はしてなかった。

もうどうでもよかった。

そして、自分が何をやっているのだろうと惨めになった。

どんどん、音を立てて崩れていく。

普通の生活に慣れない。

たった一人、愛する人を失っただけで。

惨めだ。

情けない。

あいつ等の言う通りだ。いつまでも引きずって、ジメジメして……

何なんだ、俺は。もう人生は終わったかのように悲しんで。

頭ではわかっていても、一向にあいつとの残滓が晴れない。

いっそ、あいつとの記憶が無くなってしまえばいいのに。

…それ

こそ馬鹿だ。

それこ

そ、最大の苦痛だ。

助けて欲しかった。脱け出したかった。

そう思えば思うほど、情けない自分を呪った。

いくら自虐しても足りなかった。

何をどうすればいいのかわからない。

わからない





## #7：暗闇（後書き）

なんか段々ダークな感じになってしまってますね…  
これからどうなってしまうのか、ご期待下さい

## 最終話

ピロピロピン

「！」

一気に目が覚めた。眠っていたようで、もう夕方だ。目を擦り俺は携帯を取り、メールが受信されている事がわかった。

「これは…三嶋？」

ピッ

降りて来い

「……野郎」

簡潔な文字が並んでいた。窓から外を見ると、三嶋が手を上げていた。

何故か、安心感が沸いた。

「大丈夫…？ 自棄になってない…？」

「……ああ。俺が自殺するほど肝が座ってると思うか？」

三嶋は首を横に振る。

俺達は家の前の塀に背を預け、話し合っていた。

「……実際、大丈夫なもんだよ。俺はまだ大丈夫だ。……何度もアイツの事思い出すけど、思い出すたびに強くなるような気がする……。いや、そう思わないと……。自分が情けなくて……。それに、あいつに失礼だって……」

俺が何もかも失って、生きる意味を失ったような気をしていたら、まず間違い無く奈美の奴に怒られる。

「……私もさ、何か穴が空いちゃった感じ……。何にも身に入らないみたいで……。バスケの練習も、失敗ばっかしちゃって……」

「身近な……身近な奴がいなくなるのって、これが始めてだ。……辛いよな……。遠くへ行ったならまだいいけど、もう……いないんだからな……」

凄く辛気臭くなってしまった。女と2人っきりで話しているのに気の利いたことも言えないなんて。

俺は笑ってしまった。

「……明日さ、土曜日でしょ？ パーツと遊ぼ？ 荒城でも呼んで3人でさっ」

「……何か悪いな、氣い使わせちゃって」

ドンッ

「ぐはっ」

突然、逆水平チョップが俺の胸を直撃した。ちょっと息がつかってしまった。咳き込んで俺を見て三嶋は笑った。

「明日の10時、大通りの噴水前でね！」  
「お、おお……」

それはあいつなりの励ましだったのかもしれない。

~~~~~

「あの映画面白かったね~~~~！ 何あのアクション？ 信じられない！」

「たまらないね。やっぱり絶賛されるだけあるわ！ なあマサよお！」

「俺……恥ずかしいけど……ちょっと感動したわ」

こんな涙腺が弱かったか、俺？ ちょっと目頭が熱い。

「アハハハ、でも確かによかったよ」

「へへ、実は俺も感動した」

「てめえら……へへへ」

俺達3人は笑い合った。それがとても気持ちよかった。こんな風に笑えるなんて久しぶりだった。

俺はまだ大丈夫……

「じゃあな」

「ああ」

「じゃあね」

荒城と別れ、俺達2人は夜の町を歩く。ネオンが闇を照らす。

「そういえば、もう少しで大会なんだ」

「ほー。んで、大丈夫なん？ お前最近サボり気味だったじゃんか」

「あのねえ、腐っても県で5本の指に入るスモールフォワードなのよ？ それに私は大会が迫ると余計張り切るの」

ボールでドリブルするふりをして、三嶋は最後にシュートする。流石に動きにキレがある。

そして歩いて、人気の無い住宅街に入る。俺の家ももう少しだ。口数が減ってきた頃、三嶋が口を開いた。

「……ぶつちやけ、奈美の事ちよつと恨んでるの、私」  
「なっ……？」

いきなり、とんでもない事を口にする三嶋。怒る気にもなれず、三嶋は気にせず続ける。…その表情は、自嘲気味なものだったが。

「…だって、いきなりアンタと仲良くなって…それで恋人同士になつて…そして、天国までマサの心を持って行っちゃった……」  
「……………」

何が言いたいのか、それがわからないほど俺は鈍感では無い。

「……そのさ……」  
「今だから言うけど、私、マサに気があったの。…でも面面向かって話すのが実は苦手だったの。だから奈美を紹介して、仲良くしていこうってね。カッコ悪いでしょ」

「……」

なんて言っているのかわからなかった。こっちを向いてない三嶋の顔がどうなのか気になった。

「安心して。奈美と約束したもの。……お似合いのあんた達の間係を壊すような事はしない。……だって奈美が好きになった男なんだから……。だから、アンタの事は多分、これかも気にはなっても好きにはならない。……私にだって、プライドはあるのよ」

「……………」

そう言われて、俺はほっとしてしまった。そんな自分が少し嫌になった。

もし、誰かに好かれて、告白でもされてみたらどうするか。

……答えは決まっている。今の俺は絶対に誰とも付き合えない。

付き合おうとも思わない。

断る手間が省けてよかった、と思う自分が嫌だった。

「……でも、もし揺らいたら……。怖い。甘えて、何もかも自分の為に動いて、奈美を裏切るような事しちゃうんじゃないかって……。……でも、大丈夫だった。アンタがまだ笑えるのなら、私はアンタに振り向かない。……マサは大丈夫なんだって」

「……………悪い。そんな風に考えさせて……………」

「……………！……………あーあ、ホント、奈美が羨ましい。私も早く彼氏を捕まえて、あんた等以上のいい恋人になってみせるからね！」

振り向いて、最高の笑顔を俺に見せる三嶋。その笑顔は本当に綺麗で、彼女らしい元気を溢れ出していた。

奈美の友達がこいつでよかったと、深く思った。

それから少し時が過ぎた。

ワアアアアア

女子バスケットの県大会準決勝。体育館内にたくさんの人の歓声が入る。俺と荒城は一緒に応援していた。もちろん三嶋のチームを。

「いけええ！ 三嶋ああ！！」

「そこだ！」

俺達も試合に熱中していた。三嶋がドリブルで相手をかわす。パスをワンツー、そしていつきにセンターラインに潜り込みシュート。スパス

ウワアアアアア！

「よっしゃああ！」

「いいぞ……！」

三嶋はチームメイトと手を叩きあいガッツポーズを取る。

3日前

それは突然だった。奈美の両親から連絡があつて家に来てほしいと。何だと思い、少し緊張してしまったが俺は赴いた。

「……これを……」

「これは……」

それは日記帳だった。お袋さんはそんな大事な物を俺にくれると言っただ。その顔は悲しみに暮れたものだったが、何とか耐えていたようだ。

「これをあなたに……。奈美もきっと、そう思っていたはず」

「……………読んでいいですか？」

お袋さんは頷いた。そして俺はページをめくる。奈美の綺麗な文字が並ぶ。



今日、マーサの家に行った。最初は期待していたけれど……

それ以降は俺の知る所だった。色々書いてあったが、俺に関するものが多い事がわかった。ちよつと気恥ずかったが悪い気はしなかった。

「……………」

最後のページ。……………奈美が死ぬ前の日の記述。

「え……………」

もし、私が死んでしまったら。という事を考えてしまった。こんなマーサに知れたら彼はどんなに怒る事か。でも、もし私が死んだらマーサはどうなるのか？ 悲しむのか……いえ、きっと悲しんでくれるはず。私はそんな人と愛し合ったりしない。……………でも、もし私が死んで悲しんでばかりでいるのなら、悲しい。そして、私に氣遣って、誰も好きにならないんじゃないかって心配になる。

「……………」

……………もし、そうだとしたらやめて欲しい。いつまでも死んだ人間の事を引きずるなんて悲しすぎる。私の事を忘れて欲しくはないけど、もしそうなってしまったら構わず他の人を好きになってもいい。

「……………馬鹿野郎……………」

俺の目から一筋の涙が流れた。

私の事は忘れないで欲しいな。それが条件っていうのはちょっとわがまますぎるな。でも、もしそうしてくれるなら、嬉しいかも。私より仲がよくなったらちょっと許せないけど。

「……………ハハ……………こいつ……………」

「政吉君……………」

ちよつと不吉な事書いたけど、私はいつでもマーサの事を考えてる。好きで好きで、たまらないほど好きで。こんなのあいつに見られたら、私恥ずかしくて生きていけない。

月×日

俺は両親のいる前で泣いた。

それは嬉し涙か、可笑しくての涙なのか。

奈美らしい、馬鹿な遺言。

もしかしたら、あいつは予期していたのかもしれない。

幸せになればなるほど、別れは辛い  
それは本当だった  
だから悲しみに暮れ  
そして強くなる  
愛した人がいなくなつて、俺は弱さと強さを手に入れた。  
それ自体、悲しい事だけど……

その日記帳を見て、俺には踏ん切りが出来た。  
だけど、絶対に俺は忘れない。あいつとの全てを。  
もし、忘れたのなら俺はまたこの日記帳を見るだろう。  
何もかもが新鮮で、楽しい毎日。  
夢のような日々。

「あーあ、惜しかったなあ……あと1点だったのにな」  
「……………」  
「うわわっ、わりい！」

三嶋のチームは負けた。後僅かという所で。しょぼくれてちよつと涙目の三嶋。

「だけでもう1年あるじゃんか。今度こそはお前の力を見せ付けてやればいいじゃねーか」

ポンッ

俺は三嶋の頭に手を置いた。三嶋は無言で頷いたが、やはり負けたのはシヨックだったようだ。しかし次の瞬間、三嶋は両手を上げて大声を上げた。

「……………よおおおおしっ！！今日はヤケ食いだ！！みんな、行くぞ  
！！！！」

「何い！？俺達もか？」

突然の提案に荒城は素っ頓狂な声を上げる。俺はそんな三嶋を見て笑ってしまった。

「行こうぜ、どうせ美味いもん食えば直る」

「…そうだな、よっし、三嶋の惜敗記念だ！！」

三人で夕陽の下、笑い合いながら歩いていく。

そんな中、俺は何故か奈美に告白した時の事を思い出した。あの時もこんな夕陽だった。

と楽しい？

私という

ああ

き合っ？

じゃあ付

んじゃねーかな？

……いい

よつと気を利かして

…もうち

といると楽しい

……お前

合いたいと思っただ

俺も付き

…っで、え！？

うんうん

き合わないか？

俺達、付

うん。いいよ

………

「おーい、何してんだよマサーー!!」

「早くしないと置いてくぞー!」

「お、おう!」

空を見上げる。

なんか目がぼやけてよく見えなかったけど、確かに赤みがあった空だった。

「……………ぐすつ……………。ホント、弱くなっちゃったな…俺は……………」

もう二度と戻らない昨日。

でも、生きている俺が明日を望まなくてどうする。

奈美…俺、なんとかやっていけるよ…………

夢は覚めるけど…忘れてしまうけど…

お前との思い出は、今も忘れられない位…輝いているから…………



## エピローグ

1年後

「あー、何か花を買うのって恥ずかしいもんだな」

奈美の墓前、暑苦しい空を見上げ、彼女の墓を見る。水をかけ、花を添える。俺が来る前に、もう花は添えてあった。多分両親だろう。

「……………」

手を合わせて、参る。

「…あれから1年か。早いな。……なあ奈美、荒城の奴に彼女ができたんだぜ？ 信じられねーよ。それに三嶋の奴は全国に行っちゃった。すげえよ、あいつ。……俺は大学に向けて猛勉強中って所かな？ 忙しいよ」

色々な事があった。…だけど、あの頃の事がまるで昨日のように思える。あの素晴らしい日々。

「さて、あんまり長居するのもあれだしな」

俺は立って、奈美の墓を見た。思い出を振り返ると悲しくなる事もあるが、それ以上にあいつといった幸せの 때가俺の脳裏に蘇る。辛



気臭くはない。

「俺……強くなったかな？ それとも、まだお前の事を引きずってるか？ ……でも、俺は強くなったと思う。お前の心は俺の中にある。俺達はいつまでも一つだよ」

嘘はついてなかった。もし、また新しい彼女が出来てもそう思うだろう。

「じゃあな。……絶対、いつか幸せになってお前に紹介するよ。……それがお前の望みでもあるのなら………」

見上げれば、青空が広がっていた。雲ひとつない、晴天。

その壮大さに一瞬心を奪われた。

俺は歩く。未来へ一歩一歩。

FIN

頬を伝う涙を拭いながら

## エピローグ（後書き）

いかがだったでしょうか「たいせつなこと」。奈美の死を乗り越えて人間として成長した政吉。一生消える事のない思い出、しかしそれがあるからこそ彼は前に

進めるのかもしれませんが。これが悪い結末なのか、そうではないのかは、これを読んだあなた次第です。それでは、また機会があれば次の作品で会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5455a/>

---

たいせつなこと

2010年10月12日08時56分発行